

## 〈居心地の悪さ〉をアップグレードする

松 永 京 子

過去に書いた文章はできるだけ読み返さないようにしている。当時の未熟な自分に再会するのはなんだか気恥ずかしいし、タイポをみつけたときにはそれこそ穴にでも入ってしまったくなる。それでも、一〇年前の自分を振り返るために、勇気を出して特集「原爆文学研究一〇年——これまでとこれから」（『原爆文学研究』一〇号、二〇一一年）に投稿したエッセイを読み返してみた。

タイトルは「レッド・ステイトで原爆を語ること」——アメリカの「保守派」が多いとされる州で「原爆を語る」ことの難しさを綴っている。特集の趣旨に沿っていない気がしないでもないが、帰国後間もなかった当時の私が、アメリカに根強い「原爆肯定論」に抗おうと必死だったことがよくわかる。アメリカで——とりわけ「反原爆」的ナラティブを排除する傾向の強い場所——「原爆を語る」ことの〈居心地の悪さ〉が、私にこのエッセイを書かせたのだと思う。

一〇年経った現在、同じような文章を書くかと問われたら、おそらく答えはNOだ。「原爆肯定論」に抗おうとする姿勢が変わったわけではない。変わったのは「居心地の悪さ」だ。「原爆の語り」

が日常にあふれる広島に住む今、アメリカで経験したような「原爆を語る」ことに対する「拒絶」や「嫌悪」に出会うことはない。それどころか、「北米先住民文学」の核や原爆の表象について語る時、無条件に歓迎さえされてしまう。だが、このような〈居心地の良さ〉こそが、実はこの場所で「原爆を語る」ことの〈居心地の悪さ〉なのかもしれないと思い始めている。

広島で「原爆を語る」とき、広島（マスタースター・ナラティブ）を避けて通ることは難しい。とくに、ウラン鉱山、核実験、原発、核廃棄物による影響を描いた作家らの言葉は、（たとえ作者が意図していなくても）広島で主流の「反原爆」や「反核」のナラティブをサポートするのにもってこいの材料となり得る。それはそれでよいではないかと言われればそれまでなのだが、先住民作家らの核のナラティブを都合よく切り取り、反芻することなく広島のマスタースター・ナラティブに回収してしまうことには、やはり〈居心地の悪さ〉を感じざるを得ない。

「先住民」とは誰か、という問題と同じくらい、「先住民文学」といわれる言説の位相は複雑だ。そもそも「先住民」というカテゴリー

リそのものが社会的構築物であるといえるし、アイデンティティ、自治権、土地回復をめぐる拮抗するポリティクスを孕んだ作品もあれば、そうでない作品もある。実に多様な形で発展してきたこの文学空間において、核のナラティヴはそのわずか一頁にしか過ぎない。したがって、核のナラティヴを強調することは、「先住民文学」の一側面に光を当てながらも、同時にカテゴライズ化を拒んできた「先住民作家」らによる文学領域を単純化あるいは固定化してしまいうリスクも背負いこむ。

一方で、このような〈居心地の悪さ〉を抱きつつも、あるいはこのような〈居心地の悪さ〉があるからこそ、「原爆を語り続ける」ことよって見えてくる世界もある。それはたとえば、現代を生きるデネの人びととウラン鉱山の歴史を重ねて描くグラフィック小説家の新たな挑戦だったり、核によるアボカリプス後の世界に生きる「ひとりのナバホの男」をセルフ・ポートレートという手段でとらえた写真家の実験的試みだったりする。

アップデートは面倒だし、苦手だ。けれども、アップデートするからこそ見ることでできる景色もあるだろう。二〇年を経て新たな局面を迎えようとする今、原爆文学研究会にとつての〈居心地の悪さ〉は何だろうか。そしてそれは今後、どのようにアップデートされていくのだろうか。共に考えていくことができれば幸いである。